



2008年度総会・まちづくり記念講演会を開催

都市計画マスタープラン改定にあたって「まちづくり研究所」を求める市民の声



3月14日(土)13時半より町田市中町第三庁舎にて、町田市都市計画マスタープランの見直しと市民参加について考える記念講演会・懇談会を開催し、今回の改定に関心をもつ20名を超える市民の方々が、お忙しい週末にもかかわらず参加くださいました。また、同日の午後には町田まちづくり市民会議の2008年度総会もおこなわれました。佐藤議長があいにくの公務で欠席のため、岩上副議長のもとで今年度の活動報告および決算報告・監査報告、来年度の活動計画案と予算案の審議がなされ、全会一致でもって各報告および案は承認されました。講演と総会の後、会場隣のお食事処「天忠」にて懇談会を催しました。

主催者側挨拶と講師紹介からはじまる

当市民会議の渋谷事務局長の司会で始まった記念講演会。まず、岩上副議長から開会の挨拶がありました。副議長からは、都市計画マスタープランが町田史上初めて作られるというときにできたこの会も11年目に入るなか、今回の見直しの時期を迎えて、ぜひ本日のような勉強会をしたいと市に申し入れをしたところ、快く応じていただいた。市民との協働でやるということを担当者の方は意識されているので、どのように市民が見直しにかかわっていくのかということ、今日の議論のなかでみなさんと一緒に考えていきたいとの抱負が語られました。ひきつづいて事務局長より、今回の講師を務めていただいた都市づくり部長の高橋豊氏について紹介があり、そのなかで高橋部長が当時の都市計画部に着任された背景が解説されました。2002年9月の市議会に、まちだ路面電車の会が町田市も交通マスタープランを作ったほうが良いという請願を出し、これが議会で全会一致によって通り、その3日後に都市計画部のなかに交通問題担当が2人置かれたこと。その交通問題担当の課長としてのちに着任されたのが高橋氏であることが紹介されました。その後、たまちゃんバスとして注目されている玉川学園のコミュニティバスを手がけ、現在は部長として部全体を指揮されている高橋部長から、「町田市都市計画マスタープランの見直しと市民参加について考える」との演題で約1時間の講演をいただき、それをうけて会場との質疑応答に入りました。



2008年度総会の様子

今回の改定にかんする説明と市民からの熱い提案

高橋部長は、今回の改定の理由、「どこを改定するのか」という改定のポイント、改定作業の進め方と市民参加の具体的手順について、構想段階のことも含めてひろく説明いただきました。市民懇談会というかたちをとった質疑応答では、参加市民から多くの意見が出されました(詳細は次ページにて)。

第68号目次

2008年度総会・まちづくり記念講演会を開催	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(三)	渋谷 謙三 4
「ZAIM FESTA 2009」見物	向谷 有加 7
事務局だより・編集後記	8

2008 年度総会・まちづくり記念講演会を開催(1 ページからのつづき)

都市づくり部の説明と今回の改定理由——なぜ改定するのか

高橋部長は、都市計画部から名称が変わり、合計7つの課からなる部として再出発した都市づくり部の紹介をおこなった後、1999年にできた町田市都市計画マスタープランの「一部改定」に着手する理



高橋都市づくり部長(右側)と楠都市計画課長(左側)

由について説明しました。そのなかで部長は、策定以降の情勢変化として、北部丘陵で旧公団が計画していた住宅開発が中止されて(平成14、15年の土地区画整理事業の中止)、「農とみどりのまち」への方針転換がおこなわれたことや、相原の区画整理の計画を一度ご破算にして、もう一度まちづくりについて検討しなおしつつあることを筆頭に、都市計画マスタープランに関連する各種整備方針の策定、景観法の制定やまちづくり三法の見直しなど国の法体系の変更などのあったことを挙げました(町田市での景観条例の策定にかんするこれまでの経過も説明がありました)。

また、とくに今回の一部改定では、「ひとの移動」という課題が重視されることが示唆されました。町田市の特徴として、低層系住宅地、団地、市街化調整区域(小山田、三輪、相原・大地沢など)、そして中心市街地という4つのまちの顔があるなか、団地での高齢化の進展といった問題に対処するためにもこの4つの特徴ある地域間での移動をどのように確保するのかが、高橋部長の説明のなかでは強調されていました。「ひとは移動ができて活躍できる。誰もが不便なく移動できること」の大切さを踏まえ、「ひとの移動を視野に入れた21世紀型都市づくりのあり方」を基本的なまちづくりの理念として掲げることが明らかにされました。上記のような少子高齢化にくわえて、環境への危機感といったことにも言及があり、都市計画マスタープランは土地利用の方針や都市施設の整備方針についておもに描くものだとしても、ハードとソフトの境界線がこれまで以上になくなりつつある現状が、今回の改定の背後にはあると言えます。高橋部長の説明のなかでは「市民会議でまとめていただいたものを反映できなかった」という言葉も出ましたが、1999年当時市民会議がおこなったハードとソフトの融合した市民版マスタープランの意義が見直される時代に入ったのではないのでしょうか。

改定のポイント——どこを改定するのか

今回の改定をめぐっては、すでに昨年12月に都市計画審議会に諮問がなされています。この都市計画審議会の下に特別委員会が設置され、市役所内部でも組織横断的な体制が組まれるなか、来年度(2009年度)と再来年度(2010年度)の2年をかけて改定作業がおこなわれます。

今回の高橋部長の説明では、全体構想の部分と分野別方針の部分をまず改定するとのことでした。とくに分野別のなかの都市施設の整備にかんする方針については、章立てをわけて、整備の方針をしっかりと書くことを考えているとのことでした。また、以上の部分の見直しが終わったのちに、地域別のまちづくりの構想に着手するとのこと、この地域別の方針については、現在のところ市内を8地区にわけているものを、このまま8地域でいくのかどうかも含めて検討していくとのことでした。検討の際には、職員が地域に入って行って、地域のみなさんとディスカッションしながら、地域の方針を作っていくことになるという説明がなされました(これに関連して、市内の各地域にある街づくり団体の簡単な紹介もおこなわれました)。なお、今回の一部改定着手にあたっては、緑の基本計画と住生活基本計画(住宅マスタープラン)も連動させて取り組んでいきたい旨が説明されました。

高橋部長によれば、都市計画マスタープランのなかには「長い年月であり動きにくいものと、短い年月で動かさないといけないものがあることが運用してみてもわかった」とのこと、それぞれのスパンに応じて対応していく必要が語られました。すくなくとも20年先あるいはそれ以上を見すえつつ、10年

の幅でマスタープランを作っていくというのが、部長のスタンスとして示されました。

改定のプロセスと市民参加の手法——どうやって改定するのか

2009年4月から市役所内部で5つの作業チームが作業を開始します。それぞれの班は、①にぎわいを創出する生活基盤のまちづくり（拠点活性化）、②安心安全・防災のまちづくり（地域防災・都市復興）、③環境にやさしいまちづくり（環境先進都市）、④自然を活かすまちづくり（みどりとの共存）、⑤住み続けたいまちづくり（公共公益施設）という見直しの基本的方針に対応しています。楠(くす)都市計画課長が参加者との質疑のなかで述べたことによれば、市役所内では19名の管理職が市長から辞令をもらって作業を進め始めており、それぞれの課の課題を整理して積み上げている。そのなかには福祉の担当者に入ってもらっているとのことでした。過去10年間の総括についても、現在市の内部で積み上げをおこなっている



熱心に講演に耳を傾ける参加者のみなさん

最中とのこと。市はその後、2009年の12月から2010年の1月ぐらいの時期にまちづくりの方向性という中間報告を出し、中間報告会の後に、2010年にシンポジウムを4回ほど計画(1、4、6、8月)して意見聴取をし、修正していくことを考えているとのことでした。都市計画審議会の答申をうけて、2010年の11月から12月にかけて素案をまとめ、2011年の3月公表を目指すとのこと。

懇談会形式で質疑応答——市役所内の連携と市民参加のやり方に質問多数

以上の説明をうけて、参加した市民から多くの感想や意見が寄せられました。中期経営計画や4つの都市像との整合性についてはどうなっているのかという質問には、現在の中期経営計画は2011年度までであり、その次の中期経営計画と改正されたマスタープランとの連携をとっていく必要があるとの見通しが示されました。また、過去には市の幹部職員自らが都市計画マスタープランを机上の空論だと言ってきた現実があったという厳しい指摘にたいしては、楠課長より、都市計画マスタープランに方向性を書いてない事業はできないということを事務局として徹底していききたい。連携して事業を進めることを実現させていきたいという応答がありました。

直接の懇談会や説明会ではなくて、報告会やシンポジウムを開催するという市の今回の考え方にたいしても、厳しい意見が相次ぎました。パブリック・コメント程度で済ませてしまおうというのは、市民参加としては後退ではないか。地域のことだけでなく、全体のことについてもコンサルの作文ではなく、「もうちょっと市民に考えさせて良いのではないか」という意見が聞かれました。今回の講演会には昨年「玉のよこやまアート&ウォーク」にかかわった関係者も多数参加いただきましたが、その方々のなかからは、市民と行政が一緒になって運動していく「まちづくり研究所」のようなものを作っても良いのではないかという意見も出されました。これについては、司会の渋谷事務局長のほうより、かつての市の長期構想のなかには「美しいまち研究所」を作ろうという計画があったという補足説明とともに、かつて市長室の隣に市民の集まれる場所を開放し、気軽なディスカッションの場を設けたように、都市づくり部のなかにそうした場所を作るような試みのなかから「町田らしい方法」が見えてくるのではないかとまとめがなされました。

市民協働による都市計画マスタープランの改定にむけて

冒頭に司会より、説明に使われるパワーポイントのタイトルスライドに「主催：まちづくり市民会議」と書いてあることに注意を促し、これは市が作ったものだがかつてであれば考えられないことで、これは市民として感激すべきことであることに敏感になってほしいとの挨拶がありました。これを例として着実に市役所内の組織風土が変化しつつあるいま、都市計画を市民に身近な部門として浮かび上がらせる好機として、市民と一緒に改正に取り組むことを切に期待したいです(紙面構成：編集担当)。

■公僕の始まり・パートⅡ 学校給食係り、体育振興係り

私の公僕生活の始めの頃は、前号で草野球だの青年婦人部の行事などに明け暮れていたような書き方をしたが、もちろん決してそればかりではなく、仕事も沢山こなした。

誤解を避ける意味でも、合併当時の市役所の職員の数とか組織上の仕事区分などを資料から紹介しておく、6万1千人余の市民にさまざまなサービスを提供する市役所のスタート時の体制は、1部(総務部)、9課(庶務課、人事課、財政課、産業課、保険課、衛生課、建設課、福祉事務所、水道課など)があり、市長部局の職員数240人、その他に私が所属する市教育委員会事務局15人、議会事務局4人、農業委員会11人、学校関係者31人、消防署21人など合計322人だったと記録されている。

前にも触れたとおり、私は最初の1年半、市教委の学校給食係りとして主に給食作業員の世話役を勤めた。当時、小学校は全部で13校(内分校1)だったが、作業員は1校2-3人、全部で34、5人程度で、彼女たちの賃金の支給や勤務状況の把握をして、学校給食事業に支障をきたさないようにするのが私の役割だった。同様に、栄養士も教委にたった一人で、全校の献立表をつくり配布すると共に、全校をまわって、調理の指導や衛生管理の仕事をしていた。

どこかの学校で何か給食の問題が起きると、栄養士も私も、学校に出かけて相談にのったが、そんな時はコッペパンと脱脂粉乳ともう一品か二品の美味しいお惣菜をご馳走になることが多かった。今で言う「役得」だが、そんな意識はさらさらなく、市の給食係りが、子どもたちの食べる食事を実際に体験することは、とても大切なことだという理屈で、堂々とご馳走になって臆することは無かった。いま、思い出すと、冷や汗をかきそうな話だが、青臭いと言うか、生真面目と言うか、そんな考え方ややり方が、その後の役人としての私流の自己主張や姿勢として、いつの間にか次第に型づくられ、実のところは、この頃から少しずつ培われてきたということかも知れない。

その後の私は、市民体育の振興のための諸行事や体育施設の管理などをする社会教育係りを2年やったが、その頃は、未だ市軟式野球連盟には規約がなく、体育係りの仕事として本格的に作り直したのを記憶している。また、多くの市民の要望に応じて25mの市民プールを原町田5丁目に造ってあったが、夏のシーズンになると、肝心の水不足で昼間から水を張ることが出来ない。いまのプールのような浄水装置など無かったから、やむを得ず真夜中に水を取り換える作業が必要だった。これをやるのは私と新人の若い安斉君の二人、或る深夜、安斉君がプールの横に止めてあった車に、自転車ごと衝突し大怪我をする事件が発生して、ようやくこの仕事は外部委託されるようになったが、何ごとも問題が起きないと改善されないのは、今も昔も役所の余り変わらない所である。

■学校施設不足へ対応する庶務係り

次の3年半は庶務係りだった。ここでは、専ら小中学校々舎の増改築建設工事を担当した。当時は小学校13校、中学校6校で全19校だったが、町田市は首都圏近郊の住宅・商業中心の都市で人口は急増しつつあり、特に小学生児童の増加で、各学校共毎年のように校舎の増改築の検討を余儀なくされた。検討を余儀なくされたというのは、各校とも教室が足りないため、応急的な仮設のプレハブ教室とか極端な場合には二部授業で切り抜ける応急措置を余儀なくされていたのだ。

予想外の新たな宅地開発が発生してきたとはいえ、子どもたちの教室不足には何らかの対策をしなければならない。私は仮設の建物計画や不正規な授業形態は排して、長期的な視点で僅かずつでも本格的な学校づくりを行なうべきことを主張したが、財政的な問題で容れられず、やむなく一人単独で「謙三の学校施設白書」づくりに踏み切った。

約半年をかけて私が作成した小中学校施設白書は、以下のような内容で、自分としては、現状の思いつきのやり方を改め、少しでも各学校の教師や父兄と一緒に先行きの展望をもてるようにしたい、という一念から取り組んだものだった。

①各学校ごとの以後10年間の児童・生徒数推計とそれに見合う必要普通教室数、特別教室数と予測される各学校別の各年度不足教室数。

②年度別の各学校の教室整備計画(案)と必要投資額と国庫補助及び起債可能額

③今後の学校施設整備方針(案)―各学校別校舎配置構想図を添付。

イ) 仮設プレハブや木造校舎は避け、敷地の有効活用、校舎の耐久度、耐震安全性などから鉄筋3階建て構造、増築を配慮、学校毎の将来規模を推計し全体計画にする。

ロ) 不足教室だけに目を奪われることなく、特別教室や体育館、プールなどの建設予定地を確保した全体計画を立てて整備を進める。

ハ) 計画は、各学校長はじめ関係教諭の意見をできるだけ聴取して作る。

私は、以上のような「学校施設計画作りが必要である」という私案を、上司であった渡辺重男係長に、恐る恐る提出した。

驚いたことに、この私の想いは、教委職員のみんなが一様に感じていた問題点だったようで、私はすぐに教育長と教委の庶務課長に呼ばれ、この手作りの白書を上司の意見も取り入れて整理し、市教委の今後の方針として公表するように、との指示を受けた。

「天にも昇る心地とは、こんな気持ちを言うのか？」私は、その時、正直のところ、そう感じ、渡辺係長には心底感謝し、以後、私が最も尊敬する先輩として心して接するように心がけるようになった。

この試作品は、2ヶ月ほど経ってから立派な印刷物になって公表された。この時の毎日新聞の記事は、「市教委の若い一職員が、自力で企画し原案を作成した、町田市で初の学校施設の現状と課題をまとめた白書」と紹介してくれた。

いずれにせよこの仕事は、以後の私の20年間の役人生活で取り組んだ仕事の中で、最も忘れ難い思い出の一つになっているものだ。

■「青少年健全育成都市宣言」

1965年(昭和40年)の人事異動で、私は7年間お世話になった教育委員会事務局から市福祉事務所青少年係に配置転換になった。当時の福祉事務所の青少年係りは、文部省所管の教育委員会の青少年教育とは異なり、社会問題化していた青少年の非行化防止の対策を担う、総理府の全国青少年問題協議会の管轄下にあつて、各地方自治体での運動を展開する役割を担う市の青少年問題協議会の事務局を担当していた。

私が配属になってまもなく、青少協副会長の石川国作さん(実際の青少協は、この石川副会長中心に動いていた)が事務所に来て、資料を手にこんな話をされた。

『実は、岐阜の瑞浪市が今度こんな宣言をする。町田もだんだん子どもの非行化が増えてきたから、考えてみたらどうかね』。その資料には、瑞浪市が近々全国初の「青少年非行化防止都市を宣言する予定」と書いてあった。

早速、市の青少協の主だった役員と市の友井正男民生部長、青山茂福祉事務所長、小沢武男青少年係長などが集まり、誰にも異存なく具体化を急ぐことに決定した。名称は「青少年非行化防止」より前向きにするため「青少年健全育成都市の宣言」とした。念のため総理府で調べると、この名前での都市宣言は全国で初めてであることも判った。

それから僅か半年の、1966年(昭和41年)5月5日の「こどもの日」に、町田市は全国初の青少年健全育成都市宣言を、市立体育館で多くの関係者を集めての盛大な記念式典の席上で行なった。

私は、この都市宣言のさまざまな準備に、約半年間忙殺された。目いっぱい働いたとは、実はこんなことを言うのだと、その時初めて実感した。

宣言文一つにしても全国初だから注目の的だし、なぜ宣言するのか、宣言したら主に何をやるつもりなのか、市民の親や子供たちは何を指すのか、具体的で効果の大きい施策を打ち出さなければ、掛け声だけに終わってしまう恐れも十分に考えられる。私は施策の主軸は何かと自問自答を続けた。

その頃、総理府から貰った資料に、西ドイツのスポーツ・ユーゲントという組織体の日本語での資料が目についた。サッカーが特に強かった西ドイツでは、子どもたちをサッカーを中心とするスポーツで健全に育てようとする国の計画があり、それを「西ドイツ・ゴールドンプラン」と呼んでいた。当時、日本ではこの「スポーツ・ユーゲント」のことを「スポーツ少年団」と呼び、地域中心の少年団の育成を始めたばかりだった。

私は、探していたもののひとつは「これだ」と思い、「スポーツ少年団結成のすすめ」という資料をつくり配って歩いた。当時、私は町田に初のサッカーチームを創り、子どもたちへの普及を考え始めた時だった。この二つがキッカケとなり、鶴間の小原さんによる「鶴間スポーツ少年団」が、相原の木下さんの尽力で「相原スポーツ少年団」などが、市内に次々に誕生し、具体的な「青少年健全育成都市」を目指す活動が動き出すことになった。青少年の仕事に携わって、私は実にいろいろな勉強の機会に恵まれた。次回は手塚治虫さんとの出会など、謙三のふるさとづくりの目覚めなどに触れてみたい。

「ZAIM FESTA 2009」見物 ——「アート」を資源としたまちづくりについての考察、 そのとば口として——

向谷有加
横浜市では今年の4月から、開港150周年を記念して大博覧会「開国・開港Y150」が半年間開催されます。横浜の動きにいろいろと注目が集まりそのような2009年、この博覧会ではアート系イベントもひとつの目玉として用意されている模様です（開国Y150の詳細については<http://event.yokohama150.org/about/index.html>をご覧ください）。

そんな横浜市のアートシーンをここ数年牽引してきた施設のひとつが、横浜創造界隈拠点施設「ZAIM」です。「ZAIM」は市（※運営は横浜市芸術文化財団）がアーティスト／団体に活動の場を提供する試みの先進例である点でも注目されてきました。そのZAIMについて、本館とともにアーティストたちのオープンスペースとして使用されてきた別館が、2009年3月いっぱいまで閉鎖されるというニュースを知りました。

「ZAIM」の本館と別館はそれぞれ旧関東財務局と労働基準局として使われた歴史ある建物ですが、昨年秋に消防法に抵触する建造物であることが指摘されたため、急きょ3月末で別館を閉鎖し取り壊すことが決まったそうです。そんな話の折、「ZAIM FESTA 2009」という年に一度のイベントが2月27日から3月9日にかけて行われるという情報も入手しました。本館と別館両方でおこなわれる最後のZAIMフェスタ、そこで見聞したことをかんたんにご報告します。

ZAIM FESTA 2009

「ZAIM」は京浜東北線関内駅すぐそば、横浜スタジアムと中華街に隣接する好立地にあり、このなかでは約30の団体・アーティストがそれぞれに創作活動をおこなっています。開催期間中の週末には外部ゲストによるイベントも用意されていましたが、このフェスタのメインは、「ZAIM」に入居する30以上のアーティスト／団体の普段の創作活動を一般に公開



することであり、筆者もまた入居している多彩なアートを楽しみました。

ここで創作活動を行っているアーティストの多くは、横浜という東京ではない、しかし求心力のある場所から創作活動を発信できる地の利と、通常的美術館では実現できない会場構成が可能である創作の場としての魅力とを感じ、ZAIMを活動拠点に据えているということ、関係者へのインタビューで知りました。このような幅広い表現活動を許容するオープンスペースが急に閉鎖されることに戸惑い、また、オープンスペースが閉鎖されることによって今後の活動に少なからずしわ寄せが来ることへの困惑の声も、そこはかとなくではありますが耳にしたのが印象的でした。

「ZAIM」の入居が4年の暫定期間であると承知のうえでも、次の活動拠点を手に入れるためのプレゼン等の準備を期間内から考えなければならず、そのための準備や活動によって創作の停滞を生むことへの懸念を、たとえば入居しているあるアーティストからうかがうことができました。あるいはまた、「ZAIM」で来年度展示を考えていた若いアーティストである美術系学生が、今回の別館取り壊しに少なからずショックを受けているという声も聞きました。こうした声からは、「ZAIM」が創作者の自由な要望がかなう、かけがえのない場所として育まれてきたことがうかがわれます。

創造界隈の一角をみて

——「ZAIM」の現状から考察したいこと

アーティストの立場に立てば行政的な期限を設けたプロジェクトのスケジュールは負担になりうること。また、行政のスケジュールがアート創作の時間の流れと相容れないものであること。現場の声からはこんなことが明らかになっていると思います。この根底には横浜の「ZAIM」の場合、行政が考えていた芸術観とアーティストが実践する芸術とのズレがあるのではないかと感じます。

今回のZAIM FESTAで感じたこのズレを、筆者は現時点でまだうまく言葉にできません。しかし、今回「ZAIM」で見聞したことは「アート」を資源としたまちづくりを、今後町田市が考えるさい、なにがしかの示唆をもたらすのではないかと思います。

事務局だより

定例会のおしらせ

・5月の定例会は5月6日(水曜日)です。

中央公民館 学習室(3) 18:00～

芹ヶ谷公園さくら祭りが盛況でした

3月28日(土)～29日(日)に芹ヶ谷公園にて芹ヶ谷公園さくら祭りが開催されました。両日ともにたいへん肌寒い気温で、残念ながら桜は二分咲き程度。絶好のお花見日和とはいきませんが、それでもたいへん多くの近隣市民のみなさんが訪れ、特設ステージでは子供たちのダンスチームによるパフォーマンスやよさこいチームの迫力ある演舞が目を引きました。

今年のさくら祭りでは、出店する飲食団体のすべてで、リサイクル可能な容器かリユース食器が使用されました。リサイクル可能な容器は食べ物に触れる内部がシートで覆われており、飲食後にシートをはがすことで、容器をきれいなままでリサイクルすることができます。リユース食器はお汁ものやビールなどで使用され、エコ・ステーションに返却すると10円が戻るデポジット制を採っています。



市長の2009年度施政方針のなかでも「町田市のイベントすべてをエコにします」をスローガンにガイドラインを作成し、リユース食器の導入などエコ・ステーションの取り組みを支援することが明言されています。なお、4月4日(土)～5日(日)の尾根緑道さくら祭りも、まもなくです。こちらはきっと桜も大丈夫でしょう。

編集後記

今号では3月14日におこないました2008年度総会・記念講演会の模様を巻頭でお伝えしました。「ふるさとづくり50年・私の幻燈譜」も好評連載中です。



ちょうど3月は1年の区切りの時期。3月3日のひなまつりには市議会で石阪市長の2009年度施政方針演説がありました。市長はこのなかで、2009年度を「市長任期4年間の集大成の年」と位置づけ、町田ブランドの創造に向けて、市民や企業との連携や協働をさらに進めていくと宣言しています。そして最後に市長はこう決意を語っています。「職員一人ひとりが自ら変革者となり、今までの市役所のイメージを払拭し、絶えず新しい価値を提供し続ける市役所へと変わっていく姿が、市民の方から実感できるよう全力で取り組んでいきます」。市長が職員ひとりひとりとこの考え方を共有し、新しい価値を提示してくださることを期待したいと思います。



まちづくり市民会議発足の原点である町田市都市計画マスタープラン、その改定がいよいよ本格化します。古参の会員のみなさま、ぜひ当時の思いをいま一度思い起こしてみてくださいませ(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報
2009年4月1日第68号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
TEL 042-797-6947